

# 地域のいけばなクラブが末期がんの診断を受けた女性の人間関係に 及ぼした良い影響について

—MOA美術館光輪花クラブの一事例—

柴 維彦<sup>1</sup> 田中 英明<sup>2</sup>

## 抄 録

著者らは、これまで、20年にわたってがんに罹患した女性（以下、本人）を通して、心的外傷後の成長に、コミュニティのソーシャル・サポートが影響した可能性について報告した。しかし、どのようにして自主的なサポートを持つコミュニティが形成され発展していったのかについては十分な考察ができておらず課題となっていた。本人は、死去する約3年前から亡くなる直前まで、MOA美術館光輪花クラブ（以下、M美光輪花クラブ）といういけばなクラブに月2回程度通っており、本人およびインストラクターが毎回、クラブの様子などをノートに記録していた。それらのノートとインストラクターへの非構造化インタビューから、M美光輪花クラブがより良い人間関係の構築に影響した可能性について考察した。結果として、花を命あるものとして尊び、五感をつかって一輪一輪丁寧に愛でるなどのM美光輪花クラブの特徴は、自己を含めた他者への眼差しや接し方へと応用され、所属するコミュニティの人間関係を良好にし、自主的なサポートにつながったと推察された。

## キーワード

コミュニティ、末期がん、ソーシャル・サポート、いけばな、人間関係

## 1. 緒 言

花が人類史に登場するのは、諸説あるが、農耕が始まった以降だとされている。人が花を薬用などの実用的な利用方法以外に、なぜ花を愛でるようになったのかという疑問は専門家の間で一つのテーマとなっている。その問いに対して、花が色香を人に教えたからだ、とする農学者もいる。色は色彩という意味以外に、あらがままの姿、ころろなどの意味をもち、花が色香の

ような人のこころのもっとも奥底にある感情の琴線に触れたからこそ愛でるようになったのではないかとしている<sup>1)</sup>。明治初期に日本を含む東洋の思想文化の素晴らしさを西洋諸国に知らせた岡倉天心はその著書<sup>2)</sup>の中で、「原始時代の男性が初めて愛する少女に花束を贈ったとき、彼は野蛮な存在を超越したのではないのでしょうか。そのとき人は、粗野な自然のままの本能を超えた「人間」という存在になった」と述べている。また、現存する日本最古の歌集である万葉集では、160種の植物の名が登場し、登場回数の1位は萩、2位は梅というように、日本人は古代より自然の山野に咲く花を愛でていたことがうかがえる<sup>3)</sup>。そのような日本人の感性の中、神の依り代としての花、仏に供える花、鑑賞する花、の要素からいけばなが形づくられ、室町時代中期には花の名手と言われる人が登場し、江戸時代前期には修業や稽古を重視した華道が成立した。江戸時代中期には特権階級の人のものから一般大

<sup>1</sup>医療法人財団玉川会エムオーエー名古屋クリニック

〒465-0058 愛知県名古屋市東区筒井3-4-17

MOA名古屋会館2F

<sup>2</sup>一般財団法人MOA健康科学センター

〒108-0074 東京都港区高輪4-8-10 東京療院本館2F

連絡先：

柴 維彦. TEL: 052-936-5636, FAX: 052-936-5632,

E-mail: m.shiba@gyokusenkai.or.jp

受付日：2023年10月18日、受理日：2023年11月5日。

衆へ広がり始め、明治時代にはさらに一般へ浸透して花を生けることに注目したいけばなへと続いた<sup>4)</sup>。近年では、鑑賞して癒されるだけでなく、浜崎ら<sup>5)</sup>のように、いけばなを通じて認知症高齢者や心理的な課題を抱える人を支えるような、その人らしく社会参加できる健康社会の実現や人類の幸福に寄与するような動きも出てきている<sup>6)</sup>。

著者らは、20年にわたってがんに罹患した女性（以下、本人）を通して、心的外傷後の成長に、コミュニティのソーシャル・サポートが影響した可能性について報告した<sup>7)</sup>。その中のアンケートの結果で、がん患者のQOLとスピリチュアルなウェルビーイングを評価するために開発されたFACIT-Sp<sup>8)</sup> (Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual Well-Being Scale) の合計では、日本語版FACIT-Spの開発時における平均より高い得点が得られ、家族や友人との関係性についての質問からなる下位尺度の「社会」においても同様であった。また、ストレスの対処および健康保持の能力を測定するために開発されたSOC<sup>9)</sup> (sense of coherence) では戸ヶ崎らの報告した一般人の全国平均<sup>10)</sup> よりも全体的に高かった。それらの結果から、本人は、病気や機能障害、悩みなどがあり、自分自身で対処が困難になっていく終末期においても、家庭や友人らと良い人間関係を持ち支えられながら、自分の置かれている状況を混乱せずにある程度把握でき、自分の人生の意味を感じて、「健康

な生活」<sup>9,11)†1</sup>を過ごしていたと推察された。実際に、本人が属するコミュニティにおいて、当初は既存の組織的でやや義務的なサポートから始まったが、途中で新たに自由意思によるサポートが形成され、本人が亡くなるまで続いた。しかし、どのようにしてこのような自主的なサポートを持つコミュニティが形成され発展していったかについては十分に考察できておらず課題となっていた。本人が亡くなった後、その家族とサポートした関係者と話さず、本人は、MOA美術館光輪花クラブ<sup>12) †2</sup> (以降、M美光輪花クラブ)、いわゆる、地域のいけばなクラブに、がんの再発がわかった頃より亡くなる直前までの3年間にわたって月2回のペースで、インストラクター1名とクラブ生1名の1対1の環境で、体調が悪化していく中でも本人宅でおこなうなどして習い続けていたことがわかった。さらに、1回のクラブごとに、本人がクラブでの気づきや楽しかったこと、日常での美の体験や発見した美しいもの、家族の変化などを書き留めた手帳と、インストラクターが本人のクラブでの様子や発言などや自身のサポートの振り返りを記入したノートがあることがわかった。

花の癒しに関する先行研究に、内田ら<sup>13)</sup>の自ら好みの花を選び満足できるように花器に生ける行為が心理的に癒す効果が示唆される内容や、山根ら<sup>14)</sup>の花がある部屋とない部屋では花があるだけでストレスが緩和するという内容などの報告がある。また、若年の

†1 健康な生活とは、岩永が次のように定義した。①病気や機能障害、悩みなどがなく、主観的にも客観的にも快適な生活を送ることができる。②病気や機能障害、悩みなどがあっても、自分自身で対処することができ、社会的にも適応した生活を送ることができる。③病気や機能障害、悩みなどがあり、自分自身で対処することができなくても、周囲の支えによって生活していくことができる。このような3つの段階とともに提示したものであり、アントノフスキーが健康生成論における健康を直線上に表して定義した「健康-健康破綻連続体」の図中のHealth-easeという状態にきわめて近い概念のことである。

†2 MOA美術館光輪花クラブとは、MOA山月光輪花の中の、創立者である岡田茂吉のいけばなを学べるクラブである。MOA山月光輪花は、創立者が1949年に提唱した、花を通して具体的に生活の芸術化が行われていく「花による天国化」の理念の元、花の生命を大切にしてくださいとどこまでも自然の良いところを生かすいけばなであり、1972年に華道山月流として創流され、華道山月(1983年)、MOA山月(1989年)、MOA山月光輪花(1995年)と、名称変更、資格制度、カリキュラムの変更を経て、2022年に創立50周年を迎えている。公益財団法人日本いけばな芸術協会の加入団体になっている。2001年に、一般的ないけばな教室のイメージからの脱皮を図るため、MOA山月光輪花からMOA光輪花クラブが派生し、更に、2017年にリニューアルオープンしたMOA美術館が提供することを明確にするため、MOA美術館光輪花クラブへと名称変更した。創立者の芸術即生活のライフスタイルと創立者のいけばな作品集である大光輪を原点として学んでいく、美的生活コース(2018年)、芸術コースI(2019年)、芸術コースII(2020年)を順次開講し、現在に至っている。

がん患者のスピリチュアルな態度の変化について、統合医療施設内のクリニックにおいて作業療法士で美術文化法のインストラクターでもある中西ら<sup>15)</sup>が、3年にわたっていけばななどのセラピーを用いて関わり、専門的な立場から報告したものがある。今回は、花の癒しまたはスピリチュアルな態度を踏まえながら、医療機関でもなく、セラピーでもない、M美光輪花クラブという地域のいけばなクラブで習い続けていくことが、より良い人間関係の構築に影響を及ぼした可能性について、本人のレッスン手帳とインストラクターのノート、そしてインストラクターへのインタビューを通じて考えたい。

## 2. 方法

本人の死後、インストラクターには非構造化インタビューを3回行った。インストラクターへのインタビューでは、1回目は全体的なクラブ制度などの概要の確認を中心に30分程度、2回目はクラブ中の本人の発言や様子またはインストラクター自身が感じたことと考えていたことについて100分程度、3回目は2回目のインタビュー内容の確認を30分程度おこなった。2回目のインタビューをインストラクターの同意を得た上で録音し文字起こしをして、内容からグループにわけタイトルをつけた。また、M美光輪花クラブがコースごとに発行し、本人が書き留めた手帳とインストラクターが記入したノートから情報を収集した。M美光輪花クラブは、美的生活コース、芸術コースI、芸術コースIIからなる。

本人ならびにご遺族、インストラクターらに対しては、十分な倫理的配慮を行った。調査への参加は自由意思によるもので、この調査に参加することに対する利益（謝金など）や、参加しないことに対する不利益がないことを事前に口頭で説明した。また、学会発表、論文の出版などにおいて、個人が特定される情報を使用しないことを保証した。

## 3. 事例

対象者：女性 40代（発症時）

家族：夫、子供二人の4人家族

職業：事務（発症時）

### 3-1 治療経過

X年、40代で初発の乳がんの診断があった。以後20年にわたって、再発と寛解を繰り返しながら、ホルモン療法中の子宮体がんの手術も含めると、6回手術した。X+18年10月頃から骨多発転移が認められ、X+19年5月に主治医より余命の宣告があり、在宅医療を受ける中、X+20年1月に亡くなった。

### 3-2 ネットワークからのソーシャル・サポート

罹患後しばらくして、地域で組織的なサポートを受けようになっていったが、やや義務的な感じが強い面もあった。その後、自由にサポートをお互いにできるように自ら動いていき、亡くなる約3年前には、地域で新たに自主的なネットワークを構築するまでになっていき、また、亡くなる最後までネットワークからの自主的なサポートを受けることができていた。

### 3-3 MOA美術館光輪花クラブの手帳とノートの記録

各コースの中から、それぞれ3回分の記録を抽出して、それぞれのコースごとに表1～3に整理した。なお、本人の項目の中で、本人の手帳に心身の不調により記入がなかった項目は、インストラクターのノートより転用し〈〉で表した。また、インストラクターの項目で、インストラクターの発言には「」で、本人の発言は『』を用いた。

### 3-4 インストラクターへのインタビュー

「」はインストラクターの発言、『』は本人の発言とした。

#### ①始める契機

「『新しくなった光輪花（MOA光輪花クラブからMOA美術館光輪花クラブへ）は、幸せになれる、お互いに学び合おうと聞いた。自分も今まで以前のクラブのインストラクターとしてやってきたが、果たして自分のクラブ生は幸せになれるだろうか。今度インストラクターをする時はクラブ生を幸せにしたい。自分も幸せになりたい』と本人が願ったのが

始まりで、共に学ぶのだから、私のことも見ていたのだと思う、私がどう変わっていくかを。」

### ②本人の悩み

「本人の悩みとしては、自分自身のことではなく、ネットワークのこととか外のことが多かった、自分自身に気づいていくことが多くなって、自分のことを言うことが多くなっていった。外のことは消えたのか、あえて言わないでいるのか。」「人の悩みを全部聞いている。自分も本当は弱ってはいけなただけだ。その人の身になって聞いてしまうから、落ち込んだり、怒りで眠れなかったりすることなどが度々あったよう。最初の頃はそうだったけど、段々と亡くなる最期の方になると、その人が良くなるように祈られていた」

### ③いける様子

「いける時の表情をみる。一番嘘がないですね。言葉ではね、作ることができますから。本当にすっきりした時は、大事そうに片づけていました。気に入らない時は、パッと片づけていました。すごいと

ころは、初めから、ビニールを用意して、切りくずとかも持って帰っていた。」

### ④本人の花からのインストラクターの感動

「3年目の芸術コースⅡの最初のお花（写真1、2）がすごかったですよ。感動しました。本当に体は辛そうだったのですが、『あー、久しぶりにお花をいけました』って言われて。ハンゲショウの花を一本かごに入れられて、それだけでも素晴らしくて、その後どうするんだろうと思いました。その後、ガーベラを一本入れて、それも素晴らしくてね、更にどうするのかなと思っていたら、最後にガーベラをもう一本足して、『これを足すかどうか少しまよったんだけど』ってね。これ、病気を抱えている人のいける花かなあと感動しました。」

### ⑤寄り添い

「振り返りながら、落ち込むことが多くて。寄り添って、こっちが判断するのではなくて、相手が寄り添ってもらえたかを判断するものであって。」

### ⑥インストラクター自身の花からの気づき



写真1 ハンゲショウとガーベラのいけばな



写真2 いけばなを愛でる本人

「人からではなく、花から気づくことがある。技術はあっても、お花がどうしても入らない時は、自分の中で変えないといけないうところがわかった。自分で気づくと、感謝できる。もちろん、人から言われて気づく人もいるけど、私は、感謝できなかった、痛いことを言われるとつらくて。わかってはいるのだけれど。そういうことがクラブ生に対しても何回かあるけど、話したところで難しいのではないかと。自分の思った通りに入れたいと、我がでている時は尚更難しいと思う。」

#### ⑦インストラクター自身の変化

「私の中でどう変わったかわからないけど、前の方がまじめ。だんだんと遊びが増えていった。真面目ってつらいですね。自分を律するけど、ついつい人のことも律するし、人のことを言うなと律するので。」「精神的なことだけでなく、人が優しく、物質的にも、欲しい時にほしい物が手に入る、会いたいときに会える、困っているときに助言が得られる。本当にそこは変わったんです。光輪花クラブは本当に幸せになれる。私の態度とかが変わったから

本人も気づいて喜んでくれていたと思いますよ。」

## 4. 考 察

表1～3から引用した部分は、【】とした。

### 4-1 花を通しての癒しとスピリチュアルな態度

本人がクラブを始めてから亡くなるまでの約3年の間、本人の手帳とインストラクターのノートには、【来月の検査結果が不安で痛みがあると気分も落ちるよう。(X+17/2/28・美的生活コース)】、【先週は身体の痛みですごく落ち込んでいた。(X+18/6/4・芸術コースI)】、【昨日の検査結果が悪く、現状や不安感など吐き出した。(X+18/6/18・芸術コースI)】などの記述が残されていて、がんによる疼痛が強くなっていき、検査結果も悪くなっていくことなどから不安が強まっていたことがわかる。しかし、【先週、身体の痛みですごく落ち込んでいた時、庭に咲いている百合に気づきかけた。毎年咲いているが、色が好みでなかったが、今年は力強く感じてとても勇気づけられ、

表1 美的生活コース (全17回)

年/月/日	X+16/12/5	X+17/2/18	X+17/7/11
テ ー マ	第4回 生活の器にいてみましょう	第6回 枝一本と花一輪をいけて みましょう①	第11回 花と葉(草)の取り合わせを 楽しみましょう
本 人	体 調	〈来月の検査結果が不安で痛みがあると気分も落ちるよう。〉	
	ク ラ ブ	3回までで一輪の花をよく見る意識ができていたので、器よりまずは一輪一輪丁寧に見て新たな発見ができた。楽しめた。	頭の中で、長さ、大きさを測って違うと思うのではなく、最初の気に入った感覚で良かったのだと気づいた。
	日 常	光輪花クラブに車で向かう車の中から、青い空に1本のひこうき雲とか、風になびくすすきの大群 etc. 美しいものみつけが自然にできている自分に気づいた。	私のクラブ生が、よりそうということが今まで自分が感じていたのと違うことに気づいた、と話してくれた。一人暮らしの娘が花を飾るようになった。
イン ス ト ラ ク ター	様 子	『花一輪を3回した後で、花を良くみることをしていけたので、今までのとは違うね。前は花を2、3本入れると型にとられてしまうけど、今日はお花がすごくいいです』	2本目のナルコユリが上手く入らず、何度もやり直す。「1本目の菊のどこが良かったの?」と聞くと、『もう一度よく見よう』といけ直し、2本目もスッと入れた。『一本目がきちんとしないと次もいけられない』と満足気。
	振り返り	敷物をもっと用意すればよかった。器にも魂があることは伝えにくかった。	前回話過ぎたので、今回はあまり話さないようにしたが、そのせいかテキストがしっかりと伝えられなかった。

体の痛みが和らぎ、救われた。(X+18/6/4・芸術コース I)】、【いつもは花の時は痛みを忘れられるのだが。

(X+19/2/25・芸術コース I)】などのように、クラブや日常生活の中で花の美しさに意識が向かい関わることで、心が安らぎ、それと共に痛みが軽減している様子もたくさん記されており、花によって癒されていたことが推察される。

さらには、亡くなる2週間前に行われた芸術コース II の最終回ミニ花展 (X+20/1/8) では、【来られた時はつらそうで息切れ。数日前に歩けなくなっていた。】とあるように歩くことすら困難な状態であったにも関わらず、自分で車を運転し会場まで来て、【テキストを確認後、お花をいけられた。スタスタ歩くので驚いた。】というように数杯の花をテキパキといけている。それだけでなく、【翌日のメールに、有難うございました。そこに見える方の今年一年の幸せを願っていけさせていただき気持ちよかったです。】と、自分自身がおそらく生きることでできないであろう1年を他者が幸せに過ごせるようにと祈りを花に込めて

いたことがわかる。そこには、スピリチュアルペインをもつ人々が求め、和解することを通してもたらされるものであると窪寺<sup>16)</sup>が述べる、自己、他者、絶対者、自然、時間の5つの関係との回復がみられる。残された時間を意識しながら(時間との和解)、恐れている自分自身を受け入れ(自己との和解)、関係性が良好でなかった人も含めた他者のために(他者との和解)、花を介して自然の中の一部として(自然との和解)、大自然への畏敬の念を持って(絶対者との和解)祈りながらいけられたと推察される。

#### 4-2 MOA美術館光輪花クラブの特徴

M美光輪花クラブの特徴を他流派と比較しながらみると、未生流笹岡三代家元の笹岡隆甫は、「花をいけるという行為自体は世界中にあるが、日本人はその行為に宇宙観や人生観といった哲学的な意味合いまで見出すのだ」<sup>17)</sup>、と述べている。中西ら<sup>15)</sup>が若年のがん患者を美術文化法の自然観・人間観で支え続けたように、創立者を同じくするM美光輪花クラブでもとて

表2 芸術コース I (全18回)

年/月/日	X+18/6/4	X+18/6/18	X+19/2/25	
テーマ	第3回 生活の器にいけてみましょう	第4回 ワークショップ① 生活の器にいける 季節の花をいける	第14回 美術鑑賞⑥ 取り合わせの調和①	
本人	体調	〈先週は身体の痛みですごく落ち込んでいた。〉	〈『痛みが強い。いつもは花の時は痛みを忘れられるのだが。』〉	
	クラブ	裏のガクがしっかりとっていて、それを出したいくらい。ヒマワリってこんな裏が力強いんだと気づいた。	〈そうか、一方だけではダメなんですね。今日の気づきです。何事も色々な角度から見るのが大切ですね〉	大きな桜を切っていった。なかなかとまらなかったけど、困ったな～より楽しいな～。春を感じた。楽しめた。
インストラクター	日常	〈先週、身体の痛みですごく落ち込んでいた時、庭に咲いている百合に気づきかけた。毎年咲いているが、色が好みでなかったが、今年は力強く感じてとても勇気づけられ、体の痛みが和らぎ、救われた。〉	季節を愛でる生活 アジサイの季節、たくさんいろいろな種類のあじさいが届いた。初夏の趣で、玄関マットを夏用のものに変えたり、食器やランチョンマットを夏用のものに変えた。	
	様子	『朝、雨戸を開ける時に風の匂いが変わってきたなあと感じ、緑の色が綺麗になってきたと思う。あの人がどうのこうのと思っていたが、結局、自分がはっきりした態度をしなかったから、私自身が嫌いな人だった。』	初めの30分以上は検査結果に関するお話でした。表情はスッキリしていたが、何か覚悟されたように感じた。初めは思うようにいけられなかったが、次第に愉しまれるようになった。	『なかなかとまらないのも楽しい』と桜を留めるのに、何度も良く観ていけられた。『生死といえども大自然すなわち天意のままであるべきであると、言われれば、気が楽。』
	振り返り	お花は本当に気持ちが良いものでした。先にインストラクターの意見を言ってしまう、じっくり聞くのが苦手な私。	つらさはわかるつもりですが、同情ではなく本当に寄り添っていける自分でありたい。	帰宅後、使わなかった大きな桜の枝もいけたと連絡があった。桜さん、良かったね。

も重視している。

また、笹岡は、「いけばなの美は目の前の花の個性をきちんと見極めた上で、その花に相応しい美の法則を伝書から選び出して用い、理詰めで実に緻密に計算されたものであるが、好みは人によって異なるのでいけ方に唯一解はなく、自然のあるがままの姿を映した素直な作品を美しいという人もいれば、人間の手が加わって隅々まで手入れが行き届いた花姿に美を感じる人もいる」<sup>17)</sup>、と述べている。その点、華道最大流派である池坊が「虫食い葉・先枯れの葉・枯枝までも、みずみずしい若葉や色鮮やかな花と同じ草木の命の姿ととらえ、美を見出すことが池坊の花をいける心であり、理念です。」<sup>18)</sup>、と述べているのと同様に、M美光輪花クラブでも、創立者の「私は花に対して決して無理せず、できるだけ自然のままに活けるので、生々として長持ちするというように、あまりいじくと死んでしまうから面白くない。そこで、いつも活ける場合、まず狙いをつけておいて、スツと切ってスツと挿すと実にいい。大自然はいかなるものにも魂があることを信じて扱えば間違いない。」<sup>19)</sup>との著述があり、本人の手帳とインストラクターのノートに、「色々な方からお花をいただいた。カンパニユラがしおれたの

で水切りをした。髪が沢山抜け気力を失ったが、カンパニユラが生き返った様をみたら気力が湧いてきた。

(X+19/6/17・芸術コースⅡ)、【誕生日のバラが3日目に萎れ、水切りしたが駄目だった。あなたと私は同じなんだから、もう一度元気になってと水切りしたら、元気になって嬉しかった (X+19/9/11・芸術コースⅡ)】、【器にも魂があることは伝えにくかった (X+17/7/11・美的生活コース)】とあるように、具体的には、花だけでなく花器を含めて命あるものとして相対し、その植物が最も美しく見え、生命力が感じられる向き、角度、長さを決めて、自然の良いところをどこまでも生かし表現する<sup>20)</sup>ことを重視している。

さらに、笹岡は、「型は美しい花をいけるための唯一の近道であり、いけばな教室で最初に教わるものであり、センスで花をいけてはならないとまでは言わないが、勝負できるのは天賦の才能を持った一部の人間にに限られる」<sup>17)</sup>としている。それに対して、M美光輪花クラブは、一輪の花から始め徹底的に花の個性と自分の感性に目を向けていくことから始めている。創立者の「終始美術館を見たり、絵を見てみると、そういう頭ができて来ます。やはり花で絵を画くのです。花で筆勢みたいに見せるのです。ですから私の花は誰

表3 芸術コースⅡ (全18回)

年/月/日	X+19/6/17	X+19/9/11	X+20/1/8
テ ー マ	第2回 植物の生命力を感じ取る②	第9回 花で絵を描くようにいける②	第18回 ミニ花展
本 人	体 調	〈『曇ったり、快復したり、曇った方が多かったかなあ』、『身体が痛い』〉	〈来られた時は辛そうで息切れ。数日前に歩けなくなっていた。〉
	ク ラ ブ	〈初めからマスクをしていても良い匂いがしたと、スツと百合をいけられた。〉	〈テキストを確認後、お花をいけられた。スタスタ歩くので驚いた。〉
	日 常	〈色々な方からお花をいただいた。カンパニユラがしおれたので水切りをした。髪が沢山抜け気力を失ったが、カンパニユラが生き返った様をみたら気力が湧いてきた。〉	〈誕生日のバラが3日目に萎れ、水切りしたが駄目だった。あなたと私は同じなんだから、もう一度元気になってと水切りしたら、元気になって嬉しかった〉
イン ス ト ラ ク ー タ ー	様 子	芸術に生きるを読むと『なるほどね』と感慨深めでした。 創立者のいけばなを鑑賞して『あじさいが本当に元気。かごの部分をかくしてみると、大地に植えられたままのようだ』	「3年間のクラブはどうだった？幸せになれた？」と聞くと、「う～ん」と笑いながら答えられなかった。『あなたは幸せだね』と反対に言われ、「お陰様で幸せよ」と答えた。
	振 り 返 り	2回目も楽しんでいただきありがたかった	つらさをわかってなくて、なんて心無いことを言ってしまったんだろうと自分で情けなくなっていました。ごめんなさいね

もが褒めますが、つまり絵を描くのですから、絵心がなくては本当ではありません。絵心ということは終始絵を見る事です。ですから美術館はそういう事にも一つの効果があるわけです。」<sup>20)</sup>という言葉があるように、創立者のいけばな作品や、日本を中心とする絵画、書、器などの美術品の鑑賞も通して、感性を育てようと試みているところにも特徴がある。実際に、その試みとして、創立者は箱根と熱海に美術館をもつ現在の公益財団法人岡田茂吉美術文化財団へとつながる財団まで設立している<sup>21)</sup>。

「日本では以前より花道に限らず芸道<sup>22)</sup>は、禅道に似て各自が芸の究極を求め自分に対面し主体的に修行するものであり、修行を重ねる行為はどの芸であれその芸にとどめず、人間としてのあり方の根本法則を修得する過程となる。道は厳しく、真剣で、入門者は自己の抑制が求められ、芸の手解きを受けた後、研磨を続ける終局のない実践の道である」と、いけばな小原流の鈴木<sup>23)</sup>は述べている。それに対して、M美光輪花クラブでは、創立者の「私はなるほど楽しめる。目から一理屈ではなく、自然に知らず識らず楽しみながら、魂を高めるといふ方針でやるつもりですからね。」<sup>20)</sup>という言葉を受け、自然の美しさ、芸術の美しさを見つめ、表現する感性を培い、自分が感じた美しさを表現する体験を楽しんで重ねる中、品性の向上を図り、人を幸せにする芸術を目指している<sup>24)</sup>。人間としての成長を促すことでは共通しているが、アプローチの仕方が修行と道楽というような対極の違いがみられる。その道楽的なアプローチの仕方は、分野は少し異なるが、美術教育において、ローウェンフェルド<sup>25)</sup>が人間形成を目的におき、個々の児童の創造的な衝動を大事にすることで全体的な成長の中の一面を支えるものとして美術教育を考えていたことに通じるものがあると考えられる。

#### 4-3 人間関係への影響

これまで述べてきたM美光輪花クラブの特徴が、より良い人間関係にどのように影響していったのだろうか。本人の手帳には、【3回までで一輪の花をよく見る意識ができていたので、器よりまずは一輪一輪丁寧に見て新たな発見ができた。楽しめた。(X

+16/12/5・美的生活コース)】、【まあ、これでいいか、では次に進めないのがよくわかった。(X+17/7/11・美的生活コース)】、【ガクがしっかりしていて、それを出したいくらい。ヒマワリってこんな裏が力強いんだと気づいた。(X+18/6/4・芸術コースI)】とメモがあり、インストラクターのノートには、【2本目のナルコユリが上手く入らず、何度もやり直して「1本目の菊のどこが良かったの?」と聞くと、『もう一度よく見よう』といけ直し、2本目もスッと入った。『一本目がきちんとしないと次もいけられない』と満足気(X+17/7/11・美的生活コース)】、と記録されている。一本でも、複数本でも、型にとらわれて始めから合わせようとせず、花器も含めて一つ一つをしっかりと愛でることを基本にして、一本挿すごとに少し離れて全体を見て確認し、狙い通り入っていることを確認できたら次の植物に進むという行為<sup>20)</sup>を繰り返した結果、自然と調和が起きてくる体験をしていることが推察される。調和については、M美光輪花クラブのテキストでは、画家の千住博がピアノとバイオリンの合奏の美しいハーモニーや一枚の絵の中で二十色という具体例を挙げながら「お互いの色がお互いの折り合いをきちんと考えることによって、必ず調和がとれる。そういうことをわたしたちに教えてくれるのではないのでしょうか。つまり、芸術というのは平和創造の知恵です。仲良くやる知恵なのです。」<sup>26)</sup>と述べている言葉を引用して解説を加えている。同様のことを、芸術家の岡本太郎<sup>27)</sup>は、「日本では、調和というお互いに譲り合うことだと思っている。でも、これはほんとうの調和じゃない。ほんとうの調和とは、お互いに意見をぶっつけ、ぶつかりあうことだ」、「ほんとうの対決とは、自分を相手にぶっつけ、相手も自分にもぶつかってきて、お互いがそれによって生きること」と、日本人が陥りがちな馴れ合いの調和ではなく、本来の調和の大事さについて表現している。

さらに、本人の手帳とインストラクターのノートに、【あの人がどうのこうのと思っていたが、結局、自分のはっきりした態度をしなかったから、私自身が嫌いな人だった。(X+18/6/4・芸術コースI)】、【そうか、一方だけではダメなんですね。今日の気づきです。何事も色々な角度から見るのが大切です



ね (X+18/6/18・芸術コース I)】と本人の手帳にあり、花を通して自分と周囲の人との関係を内省しているように見える。「絵は描く人の鏡なので、そのときの精神状態などが全部出てしまうのです。」<sup>27)</sup> という千住の言葉や、「花は、いけたら、その人になる。それをいけた人自身が、そこに映し出されると言っているのです。(中略) 自分のいたらなさや弱さを受け止め、自分と向き合うことでもあるのです。」<sup>28)</sup> という草月流第四代家元の勅使川原茜の言葉を踏まえると、クラブで、命ある存在として一輪一輪の花を色々な角度から五感を使ってしっかり愛でて、その花が育っていく様子やどのような自然の中で咲いている姿まで思いを馳せていくことを繰り返す体験を重ねる中、花だけでなく人の見つけ方においても同様に、自分自身や関わる周りの人達に対して、自分の思い込みから脱して色々な側面から一人一人をしっかりと見つけることができるようになっていき、一人の人の生きている環境、生い立ちなどまで意識をめぐらせ、その中から生じる葛藤や美しさを感じることにつながって、人間関係に自然な折り合いがついていったのではないかと考える。

日本いけばな療法学会<sup>6)</sup>を設立した浜崎は、「いけばなの制作プロセスでは、花をみつけ、花に語りかけ、そして自分の心を見つめる作業をくり返すなど、多様な心の働きや身体動作がかかわっており、いわば全人格的な関与のなかで作品を完成させます。こうしたいけばなは、人の心を癒すだけではなくその成長や人格の成熟をも促すものなのです。」<sup>5)</sup>、「華道の精神性とは、美しさがある一方から観た完全な形で捉えるのではなく、不完全な形であっても美しいと思う心を育み、花から人や社会のより良いあり方を知ろうとすること」<sup>6)</sup>などと、花をいけることが人々や社会に良い影響を与えうる可能性についてM美光輪花クラブと同様のことを述べている。

このような感性を大事にして、自分や相手そして社会を見ていく姿勢は、世界中の様々な争いをファシリ

テーターとして実際にに関わり研究してきたアーノルド・ミンデル<sup>29)</sup>のプロセスワーク<sup>†3)</sup>の中にも見出せる。そのワークで鍵になるのがアウェアネスである。物事を感じ、パワーを感じ取り、パワーを明確にし、言葉にするのが難しい気持ちに気づいていくメタスキルである。その過程は花をいける行為に似通っていると考えられる。ミンデルは、そのメタスキルを使って、無意識的な、夢のような、トランスパーソナルな状態を、対立する集団内で活用できるようにすると、その集団の雰囲気は変化し、驚くべき解決がもたらされるとしている。

その現象の一端が、インストラクターへのインタビューでインストラクター自身の変化についての次の発言に見ることができる。【精神的なことだけでなく、人が優しく、物質的にも、欲しい時にほしい物が手に入る、会いたいときに会える、困っているときに助言が得られる。本当にそこは変わったんです。光輪花クラブは本当に幸せになれる。】とある。また、本人が亡くなる前日まで、次から次へとサポートする人達の訪問が途切れなかったばかりか、サポートする側が通常は疲弊することの多い終末期<sup>30)</sup>においても、楽しさや元気をもらって帰っていったような、本人とサポートする人々の間の感じの良い関係性にもみられる。以上のことから、光輪花クラブに参加することにより、人間関係が円滑になり、よりよいコミュニティの形成へ影響を与えたと考える。

最後に、終末期の方への対話を含めた関わり方は芸術療法を行う専門家にとっても難しいものである<sup>31)</sup>。しかし、いけばなクラブという非医療的な日常生活の領域において、インストラクターが、【前回話過ぎたので、今回はあまり話さないようにしたが、そのせいかテキストがしっかりと伝えきれなかった。(X+18/2/18・美的生活コース)】、【美術館での気づきをお話して、共に学びになった。話し合いが楽しかった。(X+18/7/11・美的生活コース)】、【つらさはわかるつもりですが、同情ではなく本当に寄り添って

†3 プロセスワークとは、アーノルド・ミンデルが深層心理学を一つのルーツとし、身体の病気も、人間関係のトラブルも、組織や社会の問題すら、その意味を探求して、そこから得られた理解を個人や社会が統合できれば、人と集団が変容し、新たな解決策が見いだせるとするワークのこと。

ける自分でありたい (X+18/6/18・芸術コース I)】、【つらさをわかってなくて、なんて心無いことを言ってしまったんだろうと自分で情けなくなってしまった。ごめんなさいね (X+20/1/8・芸術コース II)】、【振り返りながら、落ち込むことが多くて。寄り添って、こっちが判断するのではなくて、相手が寄り添ってもらえたかを判断するものであって。(インタビュー)】というように、どこまでも花や書画などの美と一緒に楽しみながら、花のいけ方だけでなく各々の生き方まで見つめようとする<sup>24)</sup> 基本的な姿勢を大切に、絶えずその立ち位置について試行錯誤して探求していく姿は、緩和ケアなどの専門分野で芸術療法を行うアーティストや対話をこころがけて医療を行う専門家にとっても学ぶことが多いように考える。そして、二人のやりとりの様子は、本人とインストラクターというそれぞれがしっかりと愛でられた二輪の花のいけばな作品のように調和へ近づいていったようにも見える。クラブの度に、使用する花、枝、花器などを、時には遠くの花屋まで出かけて、一つ一つ丁寧に愛でて楽しみながら準備され続けたインストラクターの誠意は本人の人生を最期まで支え続けたと考える。

## 謝 辞

生前、本研究へご理解とご協力をいただきましたご本人に本論文を捧げさせていただきます。最期まで支えられたご家族にも深く敬意の念を表します。

本論文を取りまとめるにあたり、インタビューを受けていただいたインストラクターをはじめ、名古屋療院、MOA美術館のスタッフの皆様から、資料のご提供やご助言を賜りました。また、一般財団法人MOA健康科学センターの木村友昭主任研究員には、全体的な方向性と細部に至るまで何度も丁寧なご示唆をいただきました。サポートを賜りました関係者各位に、改めて心より御礼申し上げます。

## 利益相反に関する開示

著者らは、本論文の研究内容について利益相反 (Conflict of interest) はありません。本研究は、一般財団法人MOA健康科学センターの研究費によって実施されました。

## [参考文献]

- 1) 佐藤洋一郎. 人が花に出会ったとき. (編者) 日高敏隆, 白幡洋三郎. 人はなぜ花を愛でるのか. 八坂書房. 東京. 109-128. 2007
- 2) 岡倉天心. (訳者) 夏川賀央. 茶の本. 致知出版社. 東京. 2014 (原著: Okakura K. The book of tea. Fox Duffield & Company. New York. 1906)
- 3) 中尾佐助. 花と気の文化史. 岩波書店. 東京. 1986
- 4) 細川武稔. 1日5分 いけばなの歴史. 淡交社. 京都. 2022
- 5) 浜崎英子, 新川達郎. いけばな療法の世界: 花を活用したセラピーの新しい考え方を知る. あいり出版. 京都. 2022
- 6) 日本いけばな療法学会. <https://www.ikebanaryoho.com/>, (accessed 2023-10-12).
- 7) 柴維彦, 田中英明. コミュニティにおけるソーシャル・サポートについて心的外傷 後成長の視点からの考察: 20年にわたって乳がんを罹患してきた一事例を通して. MOA健科報. 25, 25-35. 2021
- 8) Noguchi W, Ohno T, Morita S, et al. Reliability and validity of the Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual (FACIT-Sp) for Japanese patients with cancer. Support Care Cancer. 12, 240-245. 2004. doi: 10.1007/s00520-003-0582-1.
- 9) 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典. 健康生成力SOCと人生・社会-全国代表サンプル調査と分析-. 有信堂高文社. 東京. 2017
- 10) 戸ヶ里泰典, 山崎喜比古. 13項目5件法版 Sense of Coherence Scale の信頼性と因子的妥当性の検討. 民族衛生. 71(4), 168-182. 2005
- 11) 岩永俊博. 多様化の時代の公衆衛生: 目指すべき健康の再定義と多分野の協働. 保健医療社会学論集. 10, 19-24, 1999. doi.org/10.18918/jshms.10.0\_19.
- 12) MOA美術館光輪花クラブ. [https://acegn.moaart.or.jp/contents.php?c=ik\\_club](https://acegn.moaart.or.jp/contents.php?c=ik_club), (accessed 2023-09-13).
- 13) 内田誠也, 柴維彦, 片村宏ほか. 一輪の花を生ける行為およびその花の鑑賞が自律神経機能および肩の筋硬度、心理的な癒しに与える影響. 心身医.

- 60, 617-625. 2020. doi: 10.15064/jjpm.60.7\_617.
- 14) 山根健治, 梅澤美和, 内田誠也ほか. 花が人間の生理・心理学的パラメータに及ぼす影響. MOA健科報. 8, 51-59. 1999
- 15) 中西好子, 森岡尚夫, 黒澤由貴子ほか. 若年の末期がん患者におけるスピリチュアルな態度の変化: 文化や芸術を取り入れたケアに取り組む作業療法士の視点から. MOA健科報. 26, 29-43. 2022
- 16) 窪寺俊之. スピリチュアルケア入門. 三輪書店. 東京. 2000
- 17) 笹岡隆甫. いけばな: 知性で愛でる日本の美. 新潮社. 東京. 2011
- 18) 池坊. <https://www.ikenobo.jp/>, (accessed 2023-10-14).
- 19) 公益財団法人岡田茂吉美術文化財団. MOA美術館光輪花クラブ美的生活コース. 2018
- 20) 公益財団法人岡田茂吉美術文化財団. MOA美術館光輪花クラブ芸術コース I. 2019
- 21) 箱根美術館. <https://www.moaart.or.jp/hakone/about/>, (accessed 2023-09-20).
- 22) 久松真一. 久松真一著作集第5巻: 禅と芸術. 理想社. 東京. 1970
- 23) 鈴木榮子. いけばなにみる日本文化: 明かされた花の歴史. 思文閣出版. 京都. 2011
- 24) 公益財団法人岡田茂吉美術文化財団. MOA美術館光輪花クラブ芸術コース II. 2020
- 25) ヴィクター・ローウェンフェルド. 美術による人間形成. 黎明書房. 名古屋. 1963 (原著: Viktor L. Creative and mental growth. 3rd Edition. The Macmilian Company. London. 1957)
- 26) 千住博. わたしが芸術について語るなら. ポプラ社. 東京. 2011
- 27) 岡本太郎. 孤独がきみを強くする. 興陽館. 東京. 2016
- 28) 勅使川原茜. いけばな: 出会いと心をかたちにする. 角川書店. 東京. 2011
- 29) アーノルド・ミンデル. (訳者) 松村憲, 西田徹. 対立の炎にとどまる: 自他のあらゆる側面と向き合い、未来を共に変えるエルダーシップ. 英知出版. 東京. 2022 (原著: Arnold M. Sitting in the fire: Large group transformation using conflict and diversity. Lao Tse Press. Portland, Or. 1995)
- 30) 地域緩和ケア普及プロジェクトチーム. ホスピス・ボランティア育成プロジェクト. 勇美記念財団. 87-97. 2019
- 31) Nigel H, Malcolm P. The creative arts in palliative care. Jessica Kingsley Publishers. London. 11-15. 2008

# Positive Impact of a Community Ikebana Club on the Interpersonal Relationships of a Woman with Terminal Cancer: A Case Study of Kohrinka Flower Arrangements by MOA Museum of Art

Masahiko SHIBA<sup>1</sup>, Hideaki TANAKA<sup>2</sup>

## Abstract

This study builds upon the authors' previous research on the potential role of community social support in fostering posttraumatic growth in a woman living with breast cancer for 20 years. This study focused on how a voluntary support community may have developed, which we have not examined in the previous study. The woman participated bi-monthly in an ikebana club at the Kohrinka Flower Arrangement by the MOA Museum of Art for three years before her death. She and her instructor maintained journals documenting their experiences in each session and their impact on their daily lives. Through these notes and unstructured interviews with the instructor, this study explores how involvement in the flower arrangement sessions may have enhanced her interpersonal relationships. The results suggested that the club's principles, including honoring the flowers as living things and engaging the five senses in appreciating each bloom, extended to interactions within the community. This approach appears to have improved relationships and encouraged voluntary support within her community.

## Keywords:

community, terminal cancer, social support, ikebana, interpersonal relationship

---

<sup>1</sup>MOA Nagoya Clinic, Medical Corporation Gyokusen-kai 3-4-17 Tsutsui, Higashi-ku, Nagoya, Aichi 461-0003, Japan <sup>2</sup>MOA Health Science Foundation 4-8-10 Takanawa, Minato-ku, Tokyo 108-0074, Japan

Corresponding author: Masahiko Shiba TEL: (+81) 52-936-5636, FAX: (+81) 52-936-5632, E-mail: m.shiba@gyokusenkai.or.jp

Received 18 October 2023; accepted 5 November 2023.